

脳神経外科

文責：吉野 弘子

概 要

2007年4月の脳神経外科設立から数えて12年目であった。

これまでと変わらず山口大学脳神経外科との連携により、診療体制は安定し順調な運営が維持できている。2018年度は4月から吉野弘子と稲村彰紀が常勤医として勤務し、日本脳神経外科学会専門医2人体制での診療を維持していた。これにより、外来診療から入院治療、手術治療まで円滑に行われた。

入院、外来ともに患者数は次第に増加してきており、近隣病院・医院からの紹介件数も同様に増加してきている。一方で手術件数については横ばいである。下関地区は同規模の病院が4つあり、当番制を維持できていることから、ある程度均等に症例が分散しているものと思われる。また、救急当番日以外での手術症例の搬入は限定される。日勤帯での急患の受け入れを増やすことが重要となるが、マンパワーや入院病床の問題もあり、断らざるを得ないこともある。しかし、下関北部から山陰にかけては脳神経外科医が不足していることもありこれらの地域における当院の担う役割は重要なものとする。したがって今後も積極的に患者を受け入れ、適応症例に対しては外科的処置を行い、脳神経外科として地域医療に貢献していきたい所存である。

山口大学との診療連携ツールの一つであるドクターヘリも、今までと同様に活用されている。特に脳梗塞超急性期のrtPA静注療法後の搬送であるdrip-shipに関しては、積極的に行ってきた。rtPA単独療法による脳主幹動脈の再開通率は必ずしも高くなく、rtPA静注後にカテーテル手術を追加することで再開通率を向上させる治療が行われるようになってきている。また、画像転送システムを利用することで遠隔地でも短時間で詳細な画像の共有を行うことができるため治療適応の判断も早く、より高い治療効果が得られていると考える。

連携内容としては、従来通り当院でまずrtPAを静注し、ドクターヘリで血管内治療専門医の常在している山口大学附属病院に搬送し、血管内治

療を行ってもらったり、当院で治療を開始しながら山口大学附属病院からさらに専門医の医師派遣を行ってもらっている。今後もこの流れを継承し時間との戦いとなっている脳梗塞超急性期治療を充実させ、患者の予後改善に貢献していきたいと考えている。

rtPA静注療法のtime limitが4.5時間まで拡大されたことにより治療件数も増加しているが、まだこれらの治療を受けられる患者は脳梗塞患者の10%にも満たない。

適応となる患者をさらに増やすためには、脳梗塞急性期治療に対する市民への啓蒙、救急隊の意識向上に加え、当院救急部・病棟・放射線部・検査部スタッフのさらなる協力が必要である。心よりお願い申し上げます。

脳卒中連携パスも軌道に乗り、活用されている。これからも近隣医療機関（特に回復期リハビリテーション施設）と積極的に連携をとり、スムーズな患者の流れを構築すべく努力していく考えである。

脳神経外科の分野は多岐にわたっており、また今をもって治療・診断方法が進歩し続けている代表的な診療科である。当院でも従来の治療を継続しつつ、山口大学との連携をさらに強化しながら新しい試みを随時行っていく予定である。

H30年1月～12月手術件数

総数：76例

内訳

頭蓋内血腫除去術	5
慢性硬膜下血腫穿孔洗浄術	29
脳室ドレナージ・シャント術	5
腫瘍摘出術	1
血管内手術	11
その他	25